



日本のクリニック最前線を訪問
診療活動や経営管理 いろいろ

医療法人
おひげせんせいのこどもクリニック
北海道 札幌市

ユニークな診療システムと ワクチン接種の充実を図り、 子どもたちを感染症から守る

札幌市各区からアクセスのよい豊平区に、2019年に開業10年目を迎える「おひげせんせいのこどもクリニック」があります。印象的な名称は、米川元晴院長(44)が働きはじめてすぐ子どもたちに呼ばれてきた愛称を冠したものです。さらに診療体制もユニークで、子どもを感染症から守るための独自の診療システムを確立しています。ワクチン接種の充実にも力を入れ、地域の小児科医として信頼を集める同クリニックの取り組みを伺いました。

感染症予防と問診重視のために 考案した独自の診療システム

「おひげせんせいのこどもクリニック」に来院した患者さんは、待合室で受付を手早く済ませると、そのまま9つある診察室のいずれかに案内されます。保護者は、子どもの上着を脱がせたり、設置されたテレビやおもちゃであやしたりしながら過ごします。米川元晴院長が診察室に入ると「今日はどうしましたか」と保護者に話を聞きながら、診察が始まります。

米川院長は、北海道と東京の医療機関に勤務し、クリニック立ち上げにも参画してきました。2010年に開業した同クリニックは、米川院長の理想とする小児科医療を体現したものです。スタッフおそろいのポロシャツ、ネット予約システムなど数々の工夫があります



市内外から患者さんが訪れるので、18台分の広い駐車場を確保。冬季には院長自ら除雪車で雪かき。このために小型除雪車免許も取得した。

が、最大の特徴は9つの診察室。これは感染症予防と、問診重視の診察のために米川院長が考案しました。「小児科の患者さんはクリニックでほかの子から別の感染症をもらうことが少なくありません。これでは医療の役割を十分に果たせない。そこで複数の診察室をつくることで、患者さんを感染から守るしくみを考えたのです」と説明します。

診療中は、米川院長が各室を回ります。患者さんは先に入室しているので、速やかに診察がスタート。患者さんの移動や着替えの時間ロスがなく、1人当たりの診察時間をほぼ全て問診や説明に費やすことができます。「小さなお子さんが多いので、抗生剤などの処方が必要最小限にするのが当院の治療方針です。また、お薬を出す際も何のために必要なのか、どんな効果があるのかを保護者の方にご理解いただく。その説明の時間をしっかり確保するために、今の診療体制を確立する必要があったのです」。

特に、幼い子どもは症状を言葉で正確に伝えることが難しく、保護者からのヒアリングが診断の大きな助けになります。「いつ熱が出たのか、食欲は、排便は……と聞いていくと、8割は見当がつかます。あとは顔色や心音、検査などで確定診断を下します。小児科に多い風邪でも、髄膜炎や尿路感染症といった病気が紛れ込んでいる可能性があります。その仕分け人となる

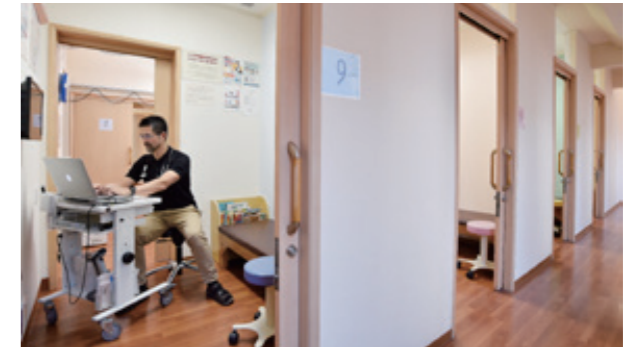
のがクリニックです。ありふれた風邪でも油断せず、丁寧な診察を心掛けています」。

「ワクチンクリニック」として 子どもたちの未来を守る役割を担う

現在、クリニックは受付事務4名と看護師1名と看護助手1名で運営されています。受付担当者は最初の1カ月間は診察介助として診察に立ち会い、治療方針やワクチンの知識を学びます。また、注射や点滴などの処置は全て米川院長が担当し、看護師はサポートに回ります。その理由は「お子さんを託していただく以上、最初から最後まで責任をもって貫きたいという思いがあります」と話します。

独自のきめ細かな診療が評判を呼び、1日100～120名ほど来院します。多いのはワクチン接種です。「ワクチンによる予防効果で、小児科の病気は減少傾向にあります。しかし日本はワクチン後進国で、VPD(ワクチンで防げる病気)の定期接種化が極めて遅れています。保護者の方にはこうした社会的背景から、感染症ごとの年間死亡数や健康リスクをお話しします。現在の予防接種制度が必ずしも万全ではないと知っていただきたい。お子さんの命や健康が、保護者の知識や判断にかかっていることをご理解いただきたいのです」。

ワクチン接種に力を入れるようになった経緯を、米川院長は次のように語ります。「私が医者になった20年ほど前は、定期接種化したワクチンが今ほど多くな



処置スペースを中心に、9つの診察室が回廊状に取り囲むレイアウト。電子カルテを載せたデスクごと移動して診察をする。

く、VPDに感染したお子さんをみとったこともあり。あの時、ワクチンを打てたら、あの子どもたちはまだ生きていただろうと今も悔やまれます。本来、命を落とす必要のない病気で亡くなる子どもをゼロにしたい。そのために保護者の方にワクチンの重要性を伝えていくのが私の役割です。こうしたワクチンへの強い思いから、北海道で遅れていた日本脳炎ワクチンの定期接種化を働き掛け、2016年に実現にこぎつけました。ワクチンで病気を予防したり、子どもの体に負担を掛けない治療ができたりしたとき、医師としてやりがいを感じるという米川院長。未来を担う子どもたちに貢献すべく、小児科医として最善を尽くすことを目指しています。

医療法人 おひげせんせいのこどもクリニック

診療科目：小児科／小児アレルギー科
院長：米川 元晴
所在地：北海道札幌市豊平区豊平7条10-3-18
URL：<http://www.ohigesei-kodomoclinic.com/>

理想のクリニックづくりの活動を全国に広げて 日本の小児医療の向上に貢献したい

米川院長は、開業医同士がつながり、医療の質向上を目指す「オープンクリニックネットワーク」(日本外来小児科学会)の世話人を務めています。相互訪問を通じてクリニック運営のヒントを得るのが目的で、「おひげせんせいのこどもクリニック」にも小児科医の先生方が全国から見学に訪れています。米川院長のノウハウをもとに、2017年は青森、2018年は福岡に複数の診察室を持つクリニックが開業しました。「地域や環境によって目指すクリニックの形は異なると思いますが、クリニックづくりのヒントになればうれしいです」と話します。このほかに日本小児科医会で学術教育委員も務め、「開業して年数を重ねるごとに、地域、さらには日本の医療のために尽くしたいという思いが強くなってきました」と語ります。多忙な日々を支えるのは家族との時間。2015年には家族4人でホノルルマラソン出場の夢を果たしました。現在は、トライアスロンへの挑戦がご自身の目標です。最近はお嬢さんと茶道を楽しむなど、多趣味の米川院長。心と体を研ぎ澄ますことが、診療活動の充実にもつながっています。

院長 Profile



よねかわ もと はる
米川 元晴 院長

1974年、北海道札幌市生まれ。1999年、北海道大学医学部卒業。同大学医学部小児科医局から、北海道大学病院、江別市立病院、日鋼記念病院、市立千歳市民病院、釧路労災病院、KKR札幌医療センターに勤務。2006年から医療法人社団めぐみ会で多摩ガーデンクリニック、南大沢メディカルプラザ小児科院長を務める。2010年、おひげせんせいのこどもクリニック開業。